# 退院後見据え 不安軽減

子どもの病気やその治療法などについて福岡市立こども病院の専門医らが解説する「#子育て処方せん」。今回はリハビリテーション科の田中文副士長に、地道なリハビリを続けてもらうために心がけていることや工夫などを聞いた。

## リハビリ

子どものリハビリが必要となるきっかけは、▽手足などのけがや病気で手術や治療をした▽脳神経の疾患で体を操る機能に障害が生じた▽肺炎などで、たんの排出や呼吸に問題が生じた▽ベッドで安静にする状態が続き、筋力や心肺機能の低下が懸念される――などが挙げられる。

長期にわたり入院しながら、手を動かす、立つ、歩くといった地道な動作を繰り返すこともある。大人でも根気の要るリハビリを子どもに続けてもらうのは簡単ではない。「これが終わったらおもちゃで遊ぼう」と呼びかけたり、好きな料理を聞いて、「退院したら食べに行けるね」と励ましたりして、楽しみや目標を見つけてもらうことを心がけている。

入院が長期に及ぶ中、「同級生と同じような学校生活を送れないのではないか」と悲観的になる子どももいる。退院後の生活を見据えたトレーニングを行うことで、子どもたちの不安を軽減させるようにもしている。例えば、松葉づえで体を支えながら学校のトイレを使う動きや、自宅の風呂に入る動きを練習するなど、具体的な生活をイメージした訓練を行っている。

田中文副士長

子どものリハビリは、家族の協力が不可欠だ。入院が長くなると家族にもストレスがたまる。時にはリハビリの時間に休んでもらったり、退院後の目標や修学方針を一緒に考えたりし、家族が負担を抱え込まないようにすることにも気を配っている。

## 家族の負担も配慮

リハビリテーションは「再びできるようになる」といった意味がある。ただ、発育過程にある子どもにとっては「新たにできるようになる」意味合いも強い。体の機能を元に戻すだけでなく、年齢に応じた能力の獲得や学び、成長を得られるよう、サポートすることを心がけている。

（聞き手・大森祐輔）

院内学級で小学校の授業を受ける子どもたち（1月下旬、福岡市立こども病院で）

## 院内学級 一人ひとりに合わせ

福岡市立こども病院を始め一部の大規模医療機関には、長期入院中の小中学生が授業を受けられる「院内学級」が開設されている。近くの公立小中学校の教諭が担任を務め、一人ひとりの症状や希望に合わせて授業の内容や進め方を練っている。

文部科学省によると、小中学校・特別支援学校の院内学級は2022年9月現在、全国に340校あり、約1500人が在籍。福岡市教育委員会によると、同市には五つの病院に小中学校の院内学級計10校があり、1月末現在、計44人が通っている。

こども病院では、近くの市立照葉小中学校の教諭各1人が担任を務める。児童5人（1月末現在）が所属する院内学級の小学校の担任、板迫理江教諭によると、児童は学年も教科書も異なるため、一つの教室で複数のホワイトボードを使うなどして授業を進める。

症状や治療の状況によっては教室にいる間も、点滴や酸素ボンベが使われる。教室での授業の前後には、教諭が子どもの病室に赴き、ベッドサイドで個別授業を行うこともある。

板迫教諭は「長く入院する子にとっては、同級生と同じように勉強できていることが心の支えになることもある。一人ひとりに合った学びを提供していきたい」と語った。

「#子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール（s-syaka1@yomiuri.com）へお願いします。

インタビューの動画はQRコードを読み込んでください